

広げよう。 オレンジの輪

認知症の人と家族を支える地域づくり

「認知症」は、誰にでも起こりうる脳の病気によるものです。そして、その発症によって家族や周囲との関係性が崩れてしまう悲しい事例もあります。住み慣れた安曇野で、最期まで尊厳を持ちながら、自分らしく生きるために——
認知症の人とその家族を支えるために——
必要なことは一体何でしょうか。
今月は、認知症にかかわる市や地域の取り組みを特集します。



オレンジリングとは…

認知症の人やその家族の「応援者」である認知症サポーター（8ページ参照）の証し。温かさを感じるオレンジ色は、「手助けします」という意味を持ちます。

認知症？ いやいや年のせいだ

「認知症は早く気が付くことが大切といわれますが、実際には見落とすしてしまいがちです」。

そう話す菱川晃基さん（88・三郷明盛）。認知症を患う妻・清美（81）さんの介護をしています。

晃基さんが最初に清美さんの変化に気が付いたのは、今から6年程前。県外で暮らす娘夫婦の家に行った時のことです。清美さんは昔から方向感覚が良く、道に迷うことはありませんでした。しかし、その日は足取りが悪く、待ち合わせ場所と全く違う場所に行っていました。

「その時は、年を取ればありがちなことだと思っていました」と晃基さん。数年後、病院で診察を受けると、レビー小体型認知症（認知症の約15%を占める病気）と診断されました。

おばあちゃんを抱き寄せ、 背中をなでた

菱川さん夫婦は、二人暮らし。清美さんの認知症が進行し、徘徊や記憶障害などの症状が出ると、目が離せない日々が続きました。

「こちらはまともだと思っても、



晃基さん自身も認知症カフェ（7ページ参照）などの交流会に出かけ、スタッフとしての役割を担っています。

ご近所の温かい目が支えに



晃基さんは27歳のころ、岡山県に住む叔父の紹介で、清美さんと出会います。2人は意気投合し、当時20歳の清美さんは信州に嫁ぎました。「仕事はなく、慣れない寒い土地に来たので、本当に苦労をかけた」と当時を語ります。今でも清美さんと共に苦労した思い出を忘れることはありません。

認知症を語る地域に

そんな中、晃基さんの心の拠り所となったのは、ご近所の温かい目や地域での交流だったと言います。

「やはり家族だけで抱えてしまうと悲惨。自分さえ頑張っていれば何とかなると思いがちですが、実際は困難です。私は妻の認知症を隠さなかつた。それによって、ずいぶん周囲に助けられました。何よりも気持ちの面で楽になりました」。

晃基さんは現在も積極的に福祉施設やご近所との交流を重ね、清美さんのありのままを受け入れるようにしています。

「温かく見守ってくれる人が増えれば、気持ちの余裕も生まれ、生活の中でできることも増えると思います」。

認知症を正しく知り、よく理解者になることが、支援の第一歩になりそうです。